

聖書：マタイ 5：7

説教題：あわれみ深い者は幸い

日時：2017年6月18日（朝拝）

山上の説教冒頭の8つの幸いの中の今日は5つ目、「あわれみ深い者は幸い」というイエス様のおことばを見て行きます。まず「あわれみ深い」とはどういうことでしょうか。あわれみとは、苦しみや悲慘の中にいる人を見て何とかそこから救い出してあげたい、いくらかでもその苦しみを軽くし、取り除いてあげたいという思いを持つこと。またその思いを持つだけでなく、そのために何かせざるにられないとその人を行動へ駆り立てるところの思いです。聖書に出て来るあわれみ深い人の記事としてはどんなものがあるでしょうか。その一つに「良きサマリア人のたとえ」があると思います。強盗に襲われて半殺しの状態に放置された人を見て、そこを通りかかったサマリア人はかわいそうに思い、近づき、介抱します。そして自分の家畜に乗せて宿屋へ連れて行き、その費用を出し、これで足りなかつたら帰りにここに寄った時にその分も払いますと言って、この人の世話を依頼します。こういう人を見たら、誰もがこの人は素晴らしい！この人こそあわれみ深い人だ！と賞賛するでしょう。

では私たちへの質問です。私たちは本当にこういう人を幸いだと思うのでしょうか。またこういう人を幸いと見て自分もそうなりたいと思っているのでしょうか。私たちはこれは素晴らしい話だとたえつつも、一方ではできればこういう場面には出会いたくないと思いがちです。サマリア人のようにするには時間も必要。労力も必要。そして経済的な犠牲も必要。自分も余裕ができたらずいこういう愛のわざに励みたいが、今の厳しい状態ではとてもとても、とこの種の愛の実践を後回しにしようとしています。しかし一方では、ではいつになったら自分にはこのように取り組む日が来るのだろうかと考えてみると、今のような考え方をしているのは、いつになってもその日はやって来ないようにも思います。いつになっても、まだ自分は厳しい、まだ自分には余裕が足りないと言って、結局、一生の間、あわれみ深い歩みをしないまま終わってしまう。イエス様は「あわれみ深い人は幸い」と言っているのに、この幸いに該当しない人、つまり幸いではない人として一生を終えるのではないかとも思います。

私たちはあわれみは素晴らしいことと思いつつも、いつもそれをするにはブレーキがかかってしまいます。なぜでしょうか。一言で言えば、その答えは自己中心の思い

が私たちを強く支配しているからでしょう。他の人をあわれむというテーマについて考える時、私たちに起こって来る思いは、いや私だってかわいそうだ！というものです。私だって困っている。私だって色々大変。私は人をあわれむよりも先に人からあわれんでもらうべき人間である。周りの人はもっと私のことを心にかけて、私のことを心配してくれるべきだ！そしてこのように考える人は、いつもその心が不平不満に満ちています。その人の心を占めているのは、「私はかわいそう。私は他の人より大変。なのに周りは何もしてくれない。優しく声をかけてくれない。」　こういう心の状態にある時、誰かが自分に悪を行なったら、もう赦すことはできません。何倍にも仕返しをして、二度とあの人が私に悪を行なわないように厳しくさばかなければならない。こうしてその人はあわれみ深い人とは反対の人になってしまいます。そうすることによってイエス様が言われた「幸い」から益々遠ざかる人、神の前に幸いではない人になってしまうのです。

では私たちはどうしたら良いのでしょうか。まず今日第一のポイントとして考えたいことは、あわれみは私たちから始まるのではないということです。以前も触れましたように、このイエス様の幸いについての教えには順番性、前後の関係性があるようです。ですからこの「あわれみ深い者」という言葉も、これまでの流れの中で考える必要があります。イエス様は3節で「心の貧しい者は幸いです」と言われました。また4節では「悲しむ者は幸いです」と言われました。つまりここで述べられている人は、自分の霊的貧しさを認め、また自分の罪深さを悲しみ告白して、ただ神の恵みによって赦され、天国の民とされた者たちです。言い換えれば神のあわれみを体験した者たちです。ですから「あわれみ深い者」であることの基礎はまず神が私たちをあわれんでくださったことです。神のあわれみが先なのです。

先ほど聖書に出て来るあわれみの記事として何を思い浮かべますかと問い、良きサマリヤ人のたとえをあげましたが、より大きな視点で言えば、神の私たちへのあわれみこそ聖書の中心メッセージでしょう。神は罪の泥沼の中でもがき、その悲惨の中で苦しんでいた私たちをあわれんでくださいました。ただかわいそうに思うだけでなく、やむにやまれぬそのお心によって、ご自身のかけがえのない尊い一人子を遣わしてくださいました。そしてその方を私たちの身代わりに十字架につけ、私たちの罪の代価を払ってくださることによって、これを信じる私たちの罪を赦し、聖め、永遠のいのちを持つ者へ、そして天国の民へと導いてくださいました。この神のあわれみが先です。あわれみは神から出ています。この神のあわれみこそ、私たちがあわれみについて考える際にいつも

土台とし、また基本としなければならないことです。

第2のポイントとして見たいことは、この神のあわれみを受けた人はその人自身もまた「あわれみ深い者」になるということです。3節と4節に見られる神のあわれみと救いを受け取った人はどうなるでしょうか。その人は5節で見たように「柔和な人」になります。あるいは欄外に別訳があるように「へりくだった人」になります。また6節で見たように「義に飢え渴く人」になります。熱心に神の義を求める人になります。それと同じように、この恵みにあずかった人は自らもあわれみ深い者になるのです。神のあわれみを体験した者としてあわれみ深い心を持つ者となるのです。

ですからその人は他の困っている人、苦しんでいる人を見て、自分から切り離したり、知らんぷりすることはできない。私が神にあわれんでいただいたように、私もその人に何かをせずにはいられないという衝動に突き動かされ、何かをするようにと導かれるのです。また自分に悪を行なう人に対してでさえそうです。以前なら徹底的にその人を叩きつぶし、二度と立ち上がれないようにすることが目標だったかもしれませんが。しかし神に敵対し、そむいていた私を神はあわれみ、救いへと入れてくださいました。そのことを思うなら、私たちは自分の敵に対してでさえ、神を映し出すあわれみの心を持たなくては！と導かれるのです。もちろん何をしても赦すというわけではありません。相手が何をしても、いいよ、いいよ、たいしたことではないよ、と笑顔でいるのがキリスト教ではありません。相手が罪を認識し、悔い改めることが和解には必要です。しかしその一方で相手へのあわれみの心、またいつでも進んで赦す心の用意は持っているべきです。

もし私たちがこのようなあわれみを示さないなら、どういうことになるでしょう。その例がマタイの福音書 18 章後半の一万タラントを赦されたしもべのとえに示されています。このしもべは一万タラント（今日に換算して約 6000 億円）という返済不可能な借金を王に赦してもらったにもかかわらず、出て行って 100 デナリ（今日に換算して約 100 万円）を貸していた仲間を赦さず、牢屋に投げ込みました。このことによってこのしもべは自分がどれほど多くを赦されたかを少しも感謝していないし、その恵みを正しく受け取ってもいないことを示しました。たとえの中の主人は言いました。「悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ、借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。」 こう言って彼を獄吏に引き渡したと記されています。私たちの他者への接し方は、私が神のし

てくださったことをどう受け止め、どう感謝しているかを現すものです。私たちは神があわれんで下さったことを感謝して、そのように周りの人々に接しているでしょうか。私たちは神から頂いた「あわれみ深い」という性質を発揮して日々歩んでいるでしょうか。そこに神の救いにあずかっていることの証拠を示しているでしょうか。

最後三つ目のポイントとして見たいことは、なぜこの人が幸いなのかについてイエス様が語られた言葉についてです。7節後半:「その人たちはあわれみを受けるから。」ここを見ると、私たちのあわれみに応じて私たちもあわれみを受けると言われているようです。しかしこれまで見て来た通り、私たちの良い行ないが基礎となり、功績と見なされて、神からの祝福を受けるといことが言われているのではありません。神のあわれみがすべての基礎です。私たちのあわれみは神のあわれみに対する感謝の応答です。しかしそのように歩む者にさらなるあわれみが約束されています。これと似ているものとして、私たちが毎週礼拝の中で祈っている主の祈りの中の罪の赦しに関する祈りがあります。「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」これも私たちが他人の罪を赦すことが神からの赦しにあずかる条件のように聞こえます。主の祈りに続いて語られているマタイの福音書6章14~15節にはさらにはっきりこう言われています。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」しかしこれは私たちが他人を赦すことが先で、その後で神が私たちの罪を赦すという意味ではありません。なぜなら主の祈りは「天にまします我らの父よ」という呼びかけから始まっていますように、罪を赦されて天の父の子どもとされた者たちの祈りだからです。ですから神の赦し先です。私たちは神の赦しを受け取り、感謝している者として、他の人の罪を赦すのです。しかしそのようにして他者の罪を赦す時、私たちは自分が本当に神の赦しに生きていることを確信するのです。神の赦しに生かされているから自分はこのように人を赦せるのだという恵みを味わうのです。そしてそうする人は益々、将来の自分の罪の赦しを確信することができる。日々なお犯し続ける罪についても、私が他の人の罪を赦したように神も私の罪を赦してくださることを確信し、喜ぶことができるのです。

今日の節のあわれみも同じでしょう。私たちは神のあわれみにまずあずかり、神への感謝によって「あわれみ深い者」として歩むのですが、そうする時、将来自分がさらにあわれみを受けることを期待することができるのです。他の人にあわれみ深くするなら、

この世でも人々からあわれみを受けるということもあるかもしれませんが、ここで考えられているのはやはり神のあわれみでしょう。そしてこの言葉は未来形で語られていて、広く将来全般に渡る約束と言えますが、神のあわれみが最も力を発揮するのはやがての最後の審判の日だと思います。聖書にははっきりと、すべての人は一人一人神の御前に出て、地上の行ないについて調べられるとされています。その日には隠れたこともすべて明るみに引き出されて、私たちは神に申し開きをする、と。この日は私たちが最もあわれみを必要とする日ではないでしょうか。もし私たちが地上で他の人にあわれみ深く歩まなかったら、この日はどうなることでしょうか。ヤコブの手紙2章13節：「あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。」 あわれみを示さなかった人は、自分もそのように神から扱われるのです。あわれみなしで最後の審判の日を迎えることは何と恐ろしいことでしょうか。

しかし反対にあわれみ深く歩んだ者は、やがての日にあわれみを受けることができる。このことがⅡテモテ1章16～18節にも記されています。そこではオネシポロという人物がパウロに非常なあわれみを示したことが述べられています。すべての人がパウロを見捨てて逃げて行く中、オネシポロは熱心にパウロを捜し、見つけ出してくれました。その彼についてパウロはこう祈っています。「かの日には主があわれみを彼に示してくださいますように。」 これは地上であわれみの行為をした彼には、最後の審判の日には神の特別なあわれみがあるということです。やがてのさばきの日に神からのあわれみを受けて御前に出ることができるとは何という幸い、何という慰めでしょうか！

今日、私たちが改めて心に留めたいことは、あわれみは神から始まっているということ、そして私たちはすでにそのあわれみを知り、その性質を頂いている者たちであるということです。そういう者としていよいよその性質を発揮して歩むように、私たちの天の父を映し出す子どもたちらしい歩みをするように、とされています。そしてそういう人にはさらなるあわれみが約束されています。私たちはつい、このあわれみというテーマは後回しにして、他人に対しては関心を示さず、「自分のために、自分のために」と歩みやすい者です。しかし実はそこに本当の幸せはない。真の幸いはあわれみ深い者の上にあるとイエス様は言っておられます。神のあわれみに感謝して、自らもこのあわれみに生きることができるよう。そして神に益々似る者とされていく道を進むとともに、将来の大事な日におけるさらなるあわれみを期待し、待ち望み、確信して喜ぶ真に幸いな歩みへこの週も歩を進めて行きたいと思えます。